

京都における水に支えられた伝統産業の立地に関する研究*

A Study of the Placement of the Traditional Industry Related to Water in Kyoto*

松下倫子**・出村嘉史***・川崎雅史***・樋口忠彦***

By Michiko MATSUSHITA・Yoshifumi DEMURA・Masashi KAWASAKI・Tadahiko HIGUCHI

1. はじめに

(1) 研究の目的と背景

京都は、様々な伝統文化・産業を育んできた都市である。中でも、豆腐、湯葉、生麴、酒などといった食品産業、友禪染といった伝統工芸において、京都の地下水・井戸水との結びつきの強さが指摘されている。水道が普及された今日でも、それらの産業の現場では、水道水を使わず深井戸から得た地下水を用いていることが多い。それは経済的な理由のみならず、要求水温や要求水質などといった要因がそれぞれの産業において重要であるという理由のため¹⁾、それらの産業と水との密接な関わりが伺える。

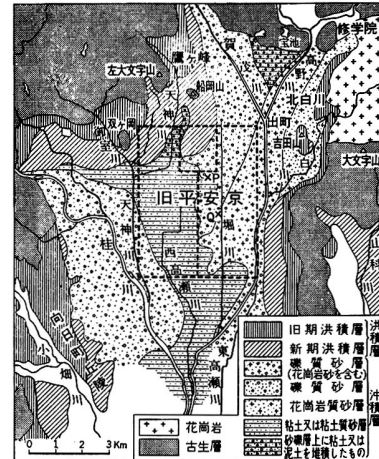
近代京都においては、浅井戸の水の枯渇、琵琶湖疏水の開削と水道の敷設、川の暗渠化などにより、水に関わるインフラストラクチャーの様相が相次いで変化した。この変革期の前後で、京都の水環境は大きく変貌しており、先に挙げたような地下水と密接に関わる産業が受けた影響は大きかったものと推測する。

本研究では、水に関わる伝統産業のうち酒造と友禪染業に着目し、近代における水環境の変革期において、これらの産業がどのような動向を示したのかを、文献と立地を調べることにより明らかにする。

これにより、京都の風土にちなんだ伝統産業を支えるインフラストラクチャーの計画に資することを期待する。

(2) 研究対象地概要

対象地域は、近世における洛中域とその周辺とした。なお、伏見は昭和6年に京都市に編入されているが、本研究で「京都」と表記した場合は「近世における洛中とその周辺」のみを指すものとし、現在の京都市伏見区に当たる地域は「伏見」として区別する。



図一 京都の地質図（『京都の歴史1』より）²⁾

かつての平安京の東半分当たる京都洛中域では、鴨川の伏流水が地表面の下にある砂利層に入り込んでいたため、たった3~4mの深さの浅井戸によって清らかな水を簡単に手に入れることが出来たという³⁾。それに対して平安京の西半分（右京域）では、粘土層の地質によって水質が悪く水が得にくかったため、市街地が发展しなかったのではないかとされている（図一参照）。

しかし近代に入り、琵琶湖疏水開削に伴い水道が普及し、一般家庭の生活用水は全て水道水に移した。その後、浅井戸の水が枯渇した。浅井戸の枯渇により昭和初期に鑿井井戸掘りが京都でも始められ、深井戸の水をポンプで汲み上げることができるようになった⁴⁾。現在京都のほぼ全域において、地下水を得るためには数十~数百m単位の深井戸を掘らねばならない状況である。

(3) 研究方法

当時の酒造業・友禪染業の様子、水の利用状況について、歴史的史料や当時の文献を用いて調べた。また近世の地誌類、そして近代に発行された『京都商工人名録』⁵⁾を用いて、各産業の立地場所を調べ、水利用状況と立地との関連性を調べ、考察した。

2. 友禪染業と水とのつながり

(1) 近世における染物業の中心地の形成

江戸時代の特産物についてまとめた『京羽二重』⁶⁾、

*Key Words：景観、空間整備・設計

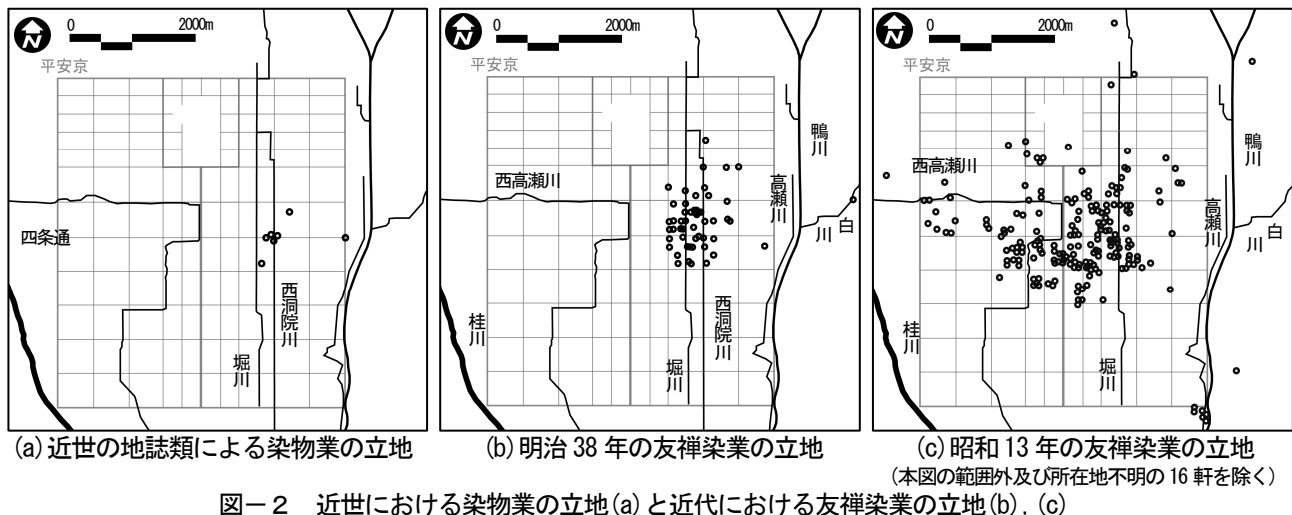
**学生員、学士、京都大学大学院工学研究科

(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL：075-753-5123,

E-mail: matsushita.michiko@t01.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

***正会員、工博、京都大学大学院工学研究科

(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL：075-753-5123)



図－２ 近世における染物業の立地(a)と近代における友禪染業の立地(b),(c)

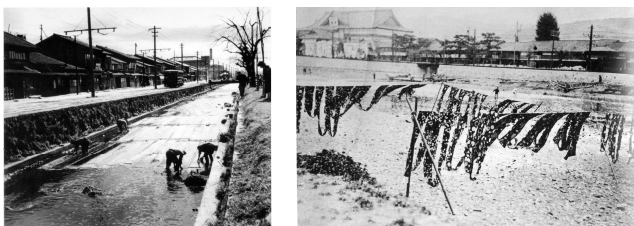
『雍州府志』⁷⁾に記された染物屋の分布は、西洞院四条付近に偏っている(図－２(a)参照)。その理由は、第一に四条通周辺が当時の商業の中心地であったこと、第二に堀川水系の浅井戸の水が得やすく、また堀川で水洗いをするにも便利だったことが考えられる。後者については、『近代友禪史』⁸⁾に「堀川涯隈に古来染物業の多きは全くその水洗に便利なからである」との記述があり、堀川の水と染物業の間には深いつながりがあったと考えられる。

(2) 近代以降の友禪染の発達と友禪流しの文化

近世の染物の中心地付近は、そのまま友禪染の中心地となった(図－２参照)。友禪染は承応3年(1654)に開発されたが、明治10年(1877)に「写し染」という技法が発明されて作業工程が大きく変わった。この技術革新により「水洗い(京都では水元と呼ばれている)」の重要性が増した他、友禪染の大量生産が可能になり、価格の低下に伴って市場が拡大、友禪染業者も増えた。よって水の需要が飛躍的に高まった。

そのために水洗いの水源確保が問題となり、業者の目は各河川に向けられた。当初は主に鴨川と堀川で水洗いが行われたが、その後各河川に広がった⁹⁾。川での水洗いは友禪流しとも呼ばれ(図－３参照)、その光景は、近代京都の風物詩として文学作品にも取り上げられた¹⁰⁾。

しかし昭和46年、市の排水規制により川での水洗いは完全に禁止され、友禪流しは見られなくなった。



図－３ 堀川(左)¹¹⁾と鴨川(右)¹²⁾での友禪流しの様子

a) 堀川・西洞院川・鴨川での水洗い

堀川・西洞院川は中心地に程近く、それまでの歴史的

経緯もあって水洗いによく使われた。しかし両河川は小河川であり、都市排水も流していたため汚染が著しかった。昭和の初期の堀川(四条あたり)では、生活排水で水が汚れてくるため、早朝以外の時間帯では水洗いが出来なかった。昭和16年の堀川は魚のすめる限界以上の汚さであり、戦後の昭和32年には水面は灰紫色で、弱い下水臭と糊の臭いが混じっていたという¹³⁾。

西洞院川は明治38年に下水溝として暗渠とされ、堀川は昭和38年に水源が絶たれ枯れ川となった。

鴨川は水量も多く、水洗いが盛んに行われた川である。しかし沿岸の料理店などからの水質悪化への苦情、風致上の問題などから、徐々に規制が厳しくなった。

業界は鴨川での水洗いの許可を求め、明治の末期と大正15年に府知事に陳情し、その都度、同業者による河原の監視などを条件に許可されてきたが、許可される場所は縮小傾向にあった¹⁴⁾。

b) 右京域の河川での水洗い

これらに不自由を覚えた業者は、代替河川として白川、高瀬川などにも進出したが、井戸水汚染や舟運妨害について苦情を受けて断念し、右京域の桂川や西高瀬川に進出した。これらの川は中心域から離れているため、水洗い専門の業者が生まれた。これにより、これらの川の沿岸に水洗い専門の工場が立地して、工場の中に河川水を引き入れて工場内で作業するようになった(図－４参照)。しかし排水は処理せずにそのまま川に流していた。

c) 地下水を用いた水洗い

規制の厳しくなる川での水洗いに不自由を覚えた業者は、水源を井戸水に頼るようになった。作業効率の改善のため屋内水洗場を工場内に設け、井戸水をモーターで汲み上げ、その排水は川に流した¹⁵⁾。

このような動きに対して、京の風物詩とまでうたわれる文化に成長した友禪流しを、工場という人目につかない場所に隠してしまうことを非難する声も、業界内にはあった¹⁶⁾。

しかしこの地下水での屋内水洗いは、鑿井井戸(深井



図－4 川の水を用いた工場内の水洗い場¹⁷⁾

戸) が一般的になるにつれて広まっていった。鑿井戸による地下水は、浅井戸とは異なり場所を問わず得られる。よってそれまでに見られた産業の土地依存性がなくなり、市内のどこにでも水洗いの工場が設けられるようになった。これにより、土地に加えて水も得られるようになった右京域に、大量生産型の大型工場が進出するようになった(図－2(c)参照)。

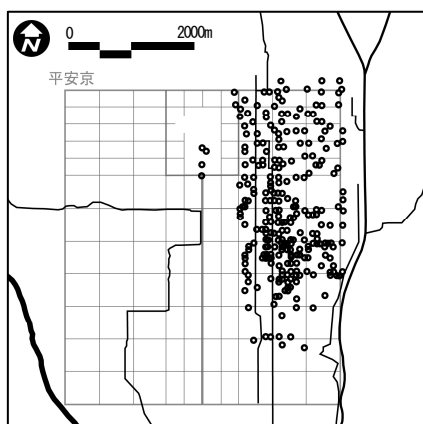
(3) 友禅染業と水とのイメージの喪失

京都染色業の工程は複雑で専門分化が進んでいるため、事業実態を把握するのは難しく、図－2(c)に挙げた業者の全てが水洗いを行っていたとは限らない。しかし図－2からは、かつて堀川と密接に関わり形成されてきた友禅染の産業立地が、他河川の水、そして鑿井戸の水と、水源を変えていくうちに分散した様子が読み取れる。

かつては浅井戸の水と、次に川と密接に結びつくことで産業地域を形成し、都市に独特の景観を与えていた友禅染は、深井戸の水を用いるようになってからは、都市の表層に現れなくなった。つまり産業と都市の景観につながりがなくなり、その独特な景観とともに産業地域としてのイメージを喪失してしまう結果となった。

3. 酒造業と京都の水とのつながり

(1) 近世以前の酒造業の繁栄と京都の水の名



図－5 中世の酒屋の分布(『酒屋名簿北野神社文書』より)¹⁸⁾

中世京都では、酒屋は土倉と並んで商業・金融資本として発達していた。応永32, 33年(1425, 1426)の酒屋名簿によると、鴨川の東や嵯峨を含めた京都には総数347

軒を超える酒屋があり、図－5のように洛中域に広く分布していた。近世には京都の酒屋は約600軒に達し、幕府に保護されて順調に発展していった¹⁹⁾。

雍州府志には「およそ、京師の水、その性、清くして柔らかなり。その味ひ、淡くて芳ばし。この水をもって酒を醸す。故に、その味ひ、甘美なり」²⁰⁾ という記述がある。当時、京都の水(浅井戸の水)が名声を獲得し、そのイメージが酒のイメージと結びつき、産地としての良好なイメージを形成していたことがわかる。

(2) 近代以降の酒造業の衰退

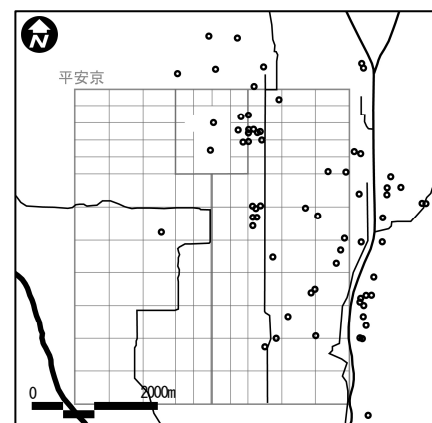
a) 京都の酒造業の衰退

明治に入り、浅井戸の水が徐々に枯渇し、水質悪化すると、近世には洛中全域に分布していた酒屋の数は、大きく減少した。

水質の悪化と都市計画上の問題に遭遇し、多くの酒屋は廃業する道を選んだ。また一部は、良質の水と土地を求めて伏見や郊外に移転していった。

残る酒屋は深井戸に水を切り替えたと考えられる。大正15年の日出新聞には「醸造用水が上下七十戸の醸造家均しく聚楽廻りの水に限られている」と書かれており²¹⁾、聚楽廻りの水にかつての名声を見出そうとしていたと推測される(図－6参照)。しかしその記事によると、伏見のような経営戦略がなく零細企業が多いことから、京都の酒造家が不遇な立場にいと指摘しており、産地としてのイメージ形成には至っていなかったと考えられる。

そして戦後、酒の産地としての京都は廃れていき、現在では洛中に酒造家は2軒という状況である。



図－6 京都における大正15年の酒造業の分布

b) 伏見と京都との比較

京都の酒屋の停滞とは裏腹に、近代の伏見は酒造の町として大きな発展を遂げ、明治40年代に京都を追い抜き、日本を代表する名産地の一つとなった。

なぜ両地域がこのような対照的な傾向を示したかについて、様々な考察がなされてきた。理由として考えられたのは、企業戦略の差²²⁾、組合の結束力の差²³⁾ などである。しかし本研究ではその理由として、京都と伏見の

それぞれの水に対する戦略の違いに注目することにする。

なお、伏見は京都より長く（1960年代まで）浅井戸の水を使用し続けられたので、その点で京都より有利な状況であったが、両者の水質に大きな差があったとはいえない²⁴⁾。両者の差はむしろ、水質の差という物理的な問題ではなく、水の名の有無にあったと考えられる。

伏見酒造組合は、伏見の地下水保全に関して早くから策を講じてきた。昭和3年に奈良電鉄の地下線路計画が持ち上がったとき、地下鉄工事による地下水への影響調査を有識者に依頼して実施し、地下鉄工事による醸造用水の影響の深刻さを、科学的に実証した。その結果を元に、組合で働きかけを行い、地下鉄案を廃案に持ち込んだ。その後昭和50年代にも、高層建造物の基礎杭が地下水に影響を及ぼす危険性に対して、地下水保存委員会を設立、施工者と組合の話し合いの場を設ける枠組みを形成することとなった²⁵⁾。

すなわち、京都が近代の水環境の変革期において浅井戸の水を手放し、それと同時に京都の名水という地位を失ってしまったのに対し、伏見では組合の努力などもあって「伏見の名水」という水の名を確立させることに成功したといえる。

（3）酒造業と水のイメージの相互作用性

酒造業においては、原料となる水の質もさることながら、水に対するイメージ、水の「名」が非常に重要である。近世までの京都は、名水とうたわれた水の存在によって産業イメージの向上に成功していたが、近代以降の水源移行において、名の継承がうまくゆかなかった。これにより、酒造業の産業地域としてのイメージが失われてしまい、産地としての競争力が低下する原因となったと考えられる。

一方伏見では、産地を挙げて水のイメージを形成することに成功し、現在も続く「伏見の名水」の名声を確立した。その水の名が酒処としての産業地域のイメージにもつながり、水のイメージと酒処としてのイメージが相乗効果を生んでいる。昭和に入り、伏見も京都と同様に浅井戸から深井戸に切り替えたが、地下水に対するイメージは悪化することなく、現在では観光対象としてもアピールしている。

4. まとめ

京都の伝統産業である酒造業と染物業は、近世には京都の水と密接につながりを持ち、京都の水の名とイメージを借りて、産地としてのイメージをつくりあげていた。しかし近代に水環境の変革が起こり、企業化・技術革新などの影響もあって、それまで維持されていた水とのつながりが断ち切られた。

友禅業は水源を川に求め、友禅流しという文化を生み出し、そのイメージを確立した。これは新しい産業都市としての景観を生み出したが、排水処理問題のために長続きしなく、やがて深井戸の地下水を工場内で用いることとなり、立地は分散した。その結果、産業地域のイメージは失われた。

酒造業は、近代に入って京都の水の名声を失い、反対に水の良いイメージを生み出した伏見に追い越され、産地としての競争力を失って衰退し、撤退した。

本研究で取り上げた二つの産業のように、水に支えられた産業が、水を得るためのインフラストラクチャーに求める役割は、水の確保という一面的なものにとどまらない。何故なら、インフラストラクチャーがうまく機能して、それが地域の特色として都市の表層に現れれば、産業地域としての好イメージの形成につながり、産業地域の競争力が増すという好循環に繋がるからである。実際に現在でも、伏見は「水と酒のまち」として対外的にアピールしており、また友禅流しも、普段は禁止されているが、年に1度、観光イベントとして京都染織青年団体協議会によって再現されている。

このように、産業と深く結びついた水に関するインフラストラクチャーは、そのあり方によっては、地域の特色を体現し、景観を形成する重要な資産となることがわかった。地域資産としての水を活用する具体的方策については、今後の研究課題とする。

参考文献

- 1) 京都新聞社編：京都いのちの水、p58, p110, 1983. など
- 2) 京都市：京都の歴史1, 京都市史編さん所, p20,
- 3) 鈴木泰久, 大滝裕一, 平野圭祐：もっと知りたい！水の都京都, 人文書院, p. 131, 2003
- 4) 小野芳朗：水の世界史, PHP研究所, p59, 2001
- 5) 京都商工人名録：合資商報会社, 京都商工人名録発行所, 1905, 1926, 1938など
- 6) 野間光辰編：新修京都叢書第二巻, 臨川書店, 1969
- 7) 立川美彦編：訓読雍州府志, 臨川書店, 1997
- 8) 村上文芽著：近代友禅史, 芸艸堂, 1927
- 9) 前掲：近代友禅史, p254~p259
- 10) 菊池昌治：写真で見る京都今昔, 新潮社, p31, 1997
- 11) 白木正俊監修：京都市の100年, 郷土出版社, p114, 2001
- 12) 田中泰彦編：京都慕情, 京都を語る会, p26, 1974
- 13) 前掲：京都いのちの水, p109~p110
- 14) 前掲：近代友禅史, p255~p256
- 15) 前掲：近代友禅史, p259~p260
- 16) 前掲：近代友禅史, p260
- 17) 白木正俊監修：京都市の100年, 郷土出版社, p45, 2001
- 18) 柚木学：酒造りの歴史, 雄山閣, p22, 1987
- 19) 伏見酒造組合一二五年史編纂委員会：伏見酒造組合一二五年史, 伏見酒造組合, p7, 2001
- 20) 前掲：訓読雍州府志, p216
- 21) 日出新聞, 大正13年9月26日「京都市内造酒発展案」の記事より
- 22) 重田澄男：京都地方の酒造業界, 京都大学人文科学研究所, p20, 1956
- 23) 前掲：伏見酒造組合一二五年史, p100
- 24) 前掲：京都地方の酒造業界, p20
- 25) 前掲：伏見酒造組合一二五年史, p87~p89, p211~p212